

「地域の居場所を事例とした「自律分散型」地域づくりの方法論」に関する研究

慶應義塾大学総合政策学部3年 則竹桃実

1. 活動場所と日程

場所：神奈川県横浜市戸塚区吉田町104-1 ザ・パークハウス戸塚1階ふらっとステーション・とつか

日程：2018年7月4日、25日、8月17日、18日、27日、28日、9月8日、16日、17日、12月8日

2. 活動目的

現在、地域づくりへの関心は高まっており、少子高齢化に伴う社会課題の解決に大きく動き出している。人口減少や少子高齢化に伴う過疎地域の増加を受け、日本全国の自治体では、地域づくりへの注目が高まっている。人口急減・超高齢化という課題を受け、政府はまち・ひと・しごと創生本部を設置し、地方自治体に対して情報、人材、財政の三分野に関する支援を行っている。国全体が地方創生に取り組むのに際して、全国各地では、行政や市民、民間企業の協働により、経済振興や観光、コミュニティ政策など様々な観点から地域づくりが進められている。

このような動きは、過疎地域のみならず、今後自身の地域においても同様の現象が起こる可能性が高いという危機感の高まりにより、都心部や関東圏の自治体も積極的に地域づくりに取り組んでいる。

現在、地域づくりの成功事例では、キーパーソンが創造的な活動を行い、地域活性化に繋がった例が多い。一人や2、3人から成る小集団が中心となり、地域貢献に繋がる新しい活動を進める中で、他者を巻き込んでいき、大きな変革をもたらしている。

このようにキーパーソンに依存した地域づくりには利点がある一方で、持続性を担保できないという欠点も大きい。たしかに、創造性や技術力の有した人材が中心となり活動を起こし、他の住民を巻き込んでいく方法は活動を起こしやすく、比較的短期間でまちを変える大きな活動に繋がりがやすい。しかし、キーパーソン自体が引退した場合、後継者に該当する者が存在しない限り、活動組織は自律的に活動を起こせず、持続的な地域づくりには繋がらない。

約2年間、筆者が文献調査、アクションリサーチ、非参与・参与観察を行う中で、「地域の居場所」が前項のような課題を抱えたキーパーソン中心の地域づくりとは異なる形の地域づくりが行われていると、分かった。異なるモデルとは、様々なステークホルダーが自主的に活動を起こし、複数の活動が同時並行で進行する形により成立する地域づくりである。

そこで、今回より持続性を考慮した地域づくりのあり方として、従来とは異なる地域づくりのモデルを探求し、今後の地域づくりの方向性を決める際の新しい選択肢として提示したい。先述した通り、大きな変革や短期間による成果を求める際、従来のキーパーソンによる牽引型モデルは成果を出しやすい。そのため、地域づくりの目的によっては必ずしも従来のモデルが適さないわけではない点を留意したい。その上で、本研究では従来のモデルを否定するのではなく、それに加えて今後選択肢として考慮すべき別の新しいモデルとして提案したい。

3. 活動内容

1年間をかけて、私は「地域の居場所における地域づくり」に焦点をあてた研究を行い、どのような地域づくりが行われ、どのような要素により実現されたのかを明らかにする。研究対象は成功事例であるふらっとステーション・とつかとし、インタビューと参与観察を行う。具体的には、実際に活動を起こした利用者に対して「どのような活動を行い」、「なぜ、どのような経緯により、活動を行うようになったのか」という質問をし、経緯を自由に語ってもらう。半構造化インタビュー法によりデータを集めた後、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(M-GTA)を用いて、地域の居場所の特性から活動が生まれるメカニズムについて仮説を構築する。また、インタビューと参与観察のデータから、ふらっとステーション・とつかにおける地域づくりの特徴を表した部分を抽出し、地域づくりの現状を描き出す。



▲健康麻雀活動の様子



▲活動者向け講座を開催している



▲ランチを作るキッチン

4. 活動成果

本活動を通じて、11組の活動者と1名のスタッフに対してインタビューを行い、助成金を頂く以前の調査と合わせて20組の活動者に対するフォーマルインタビューを実施した。加えて、活動者の活動へ参加して行う参与観察や人が集うスペースにおける非参与観察、スタッフや来場者へ対するインフォーマルインタビューなども実施した。これらの調査を終え、以下の研究成果を得られた。

①「RQ1：研究対象の地域の居場所において、どのような地域づくりが行われているのか？」に関する調査結果

インタビューと参与観察のデータから、各活動内容について「実施概要」や「運営状況」、「発生形態」、「内容」などを整理し、ふらっとステーション・とつかにおける地域づくりの特徴を抽出した。その結果、以下の3点の特徴が抽出できた。

ふらっとステーション・とつかにおける現状を地域づくりとして俯瞰的な視点から見た際、自律した小規模の活動が複数個同時に進行し、それらが統合され地域の居場所を支えている構造であると、分かった。また、個々の活動は独立しているのではなく、必要に応じて他の活動やスタッフと繋がり、互いに影響を及ぼし合っている。これらから、インターネットの「自律分散型」理論を応用し、当地域の居場所における地域づくりのモデルを「自律分散型地域づくり」と規定した。2点目の特徴は各活動の発生形態が「活動発見型」、「活動機会創出型」、「活動場所獲得型」の3つに分類できたり、活動内容が多種多様であったりと、同質的ではなく様々な形の活動を受け入れて成立している点である。3点目は戸塚区内にある別の施設との意図していない連携が活動の創発を促進していたことである。

②「RQ2：地域の居場所において、活動者が活動を起こすまでのプロセスと関わる要素はどのようなものか？」に関する調査結果

20組のインタビューのうち条件を満たした15組のものをM-GTAを使って分析した結果、活動者が活動を起こすまでのプロセスが以下であると、分かった。当所に関わる強弱、場所内外に広がる様々なネットワークから様々な人と適宜関わりつつ、第1に場所と関わり始める。そして、様々な人と関わって過ごす中で、場所と自身の適合性を感じつつ、許容する「場」や活動を起こす障壁の低さと言った当所の特性に気づく。これらと同時に、先述したネットワークを通じた人との関わりが潜在的にある活動への萌芽を引き出す過程も存在する。同時進行により2つの過程を経て、活動者は始めの一步としての活動を起こす。それを通じて、困難や幸福といった様々な現実を体感し、活動を変化させていく。それが次の活動に繋がるという過程を繰り返している。これら一連の過程を支えるのが活動者を主役にするという姿勢である。

5. 成果の活用と今後の展望

本研究の成果を踏まえて、今回焦点を当てた「地域の居場所において行われている地域づくり」に関して、実態を描くと共に、実現する方法を考察し、卒業プロジェクトとしてまとめる。

6. 謝辞

本活動を行うにあたり、ご指導頂いた飯盛義徳教授、調査にご協力頂いたふらっとステーション・とつかの関係者の皆様、資金援助をして下さった慶應義塾大学湘南藤沢学会様に厚く御礼申し上げます。